

「次世代クラウド基盤の“SDDC化”によって、インフラ管理コストを概ね4分の1に削減できましたし、デバイスの選択肢も広がりました。また、エンジニアの負荷が減り、より高付加価値なサービスの提供に注力できるようになりました」

株式会社アイネット
高橋 信久 氏



株式会社アイネット
クラウドサービス事業部
プロダクトマーケティング部
担当部長
宮川 佳子 氏

カスタマープロフィール

1971年に創業、石油業界を中心にBPOを提供し、ITサービスのノウハウを蓄積してきた。その経験と技術力を生かして、1995年ごろよりインテグレーション事業やデータセンター事業を展開。2009年から企業向けのクラウドサービスに注力し、2013年にはビッグデータ環境にも適した「Dream Cloud」サービスを開始した。2015年8月末時点で導入企業数1,000社を超え、強力な“運用力”に信頼を置くエンタープライズユーザーは多い。

新しいインフラの整備が急務とされる中、アイネットは「プロフェッショナル サービス(VMware PSO)」を活用し、迅速にプロジェクトを進めることを選択しました。VUEMウェアのエンジニアリングによって効果的に実装を進めることができ、約半年という短期間で基盤の構築を達成しました。そして、2015年11月に「Next Generation EASY Cloud」サービスを開始しました。

セルフサービス化と自動化でより高度な業務に注力

同社のクラウド基盤は、首都圏に設置された国内最高クラスのデータセンターを中心に、北海道と長野の3拠点をVMware NSXのネットワークで支えるマルチクラウド構造を採用し、開発環境やDR環境としても活用できるようになっています。

サーバー、ネットワーク、ストレージのプロビジョニングはすべてセルフサービス化され、ポータルサイトからスピーディにITリソースを提供できるようになりました。また、日々の運用保守においても、「VMware vRealize Operations」と「VMware vRealize Log Insight」を活用し、ITが判別・対処できる部分はできるだけ自動化して、人手を介さないようにしました。

「これまで私たちのサービスは、人手による運用が中心でした。エンジニアに高いストレスをかけることになりまし、いずれは限界が来ていたでしょう。VMware vRealizeを最大限に活用して障害対応の時間を削減しつつ、人でなければ解決できない高度なサービス、より満足度を向上させるサービスの提供に注力できるようになりました」と、クラウドサービス事業部 プロダクトマーケティング部 担当部長 宮川佳子氏は述べています。

品質を向上しつつ サービス提供価格を半額ほどに

クラウド基盤をVMwareのSDDCで構築したことによって、インターオペラビリティの実現や大きなコスト削減効果も生まれました。

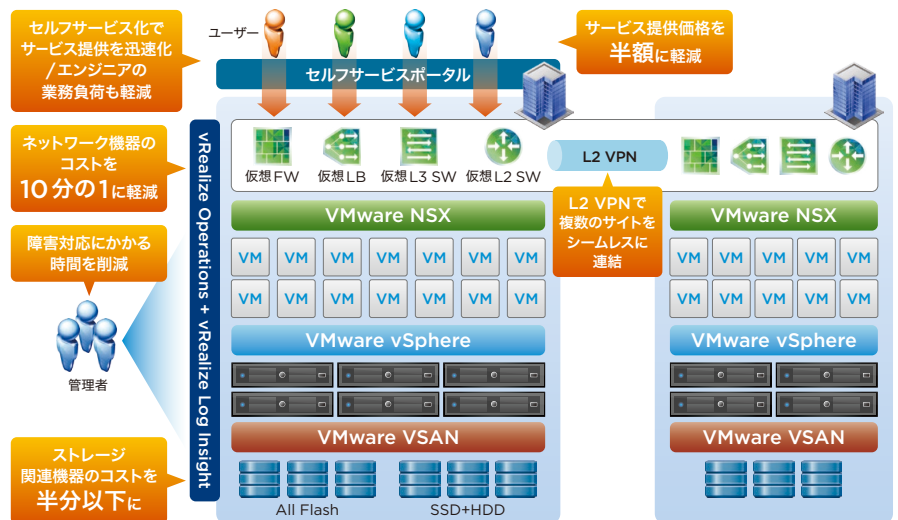
まずネットワーク面では、VMware NSXによって機器選択の制限が取り払われ、シンプル化によって機器の台数を3分の1まで縮小しつつ、安価でハイパフォーマンスな機器を選べるようになりました。物理的なゲートウェイセキュリティデバイスも、仮想化によって最小限に留めることができました。

ストレージ面では、VMware VSANを採用したことで、想定していたミッドレンジストレージを購入することなく、想定以上のI/O性能を実現できました。

そして、ネットワーク関連コストやストレージ関連コストを大きく削減し、これらを含めたインフラ管理コストを概ね4分の1にまで抑えることができたとのことです。このコスト削減効果は、エンドユーザーにも大きく還元されることになりました。

「結果的にNext Generation EASY Cloudは、ユーザーのニーズに合わせて柔軟なサービスを安価に提案することが可能になりました」(宮川氏)

アイネットでは、数多くのミッションクリティカルシステムが稼働するクラウドの信頼性を保ちつつ、新しいアプリケーションやサービスの開発にも意欲的に取り組んでいく予定です。これからも、アイネットの先進的なクラウドサービスをVMwareテクノロジーが支えていくことでしょう。



図：サーバー、ネットワーク、ストレージの仮想化によるSDDCの実現

